

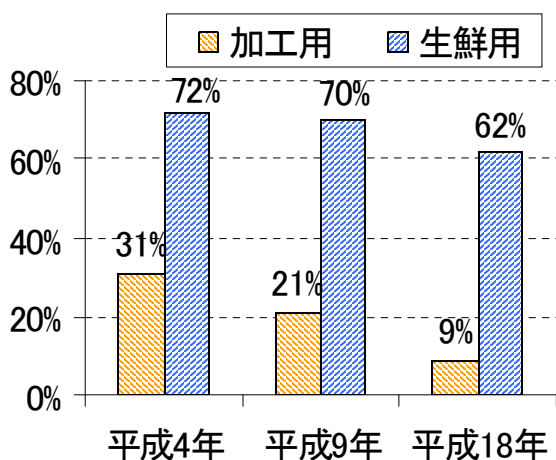
2 果実

(1) 現状と課題

食の簡便化・多様化の進展により、果実の加工品需要は増加しており、国内の果実需要の45%（平成19年）を占めている。しかし、果実の自給率は、生鮮果実においては62%である一方、加工用においては9%（平成18年）となっている。これは、国産原料は少量な上に供給が不安定であること、濃縮りんご果汁で内外価格差が輸入品の約2倍（業者より聞き取り）と大きいこと等から、主に加工品需要は輸入により賄われているためである。

このため、自給率の向上に向けて、加工用に対する国産果実の供給力の強化が課題となっている。

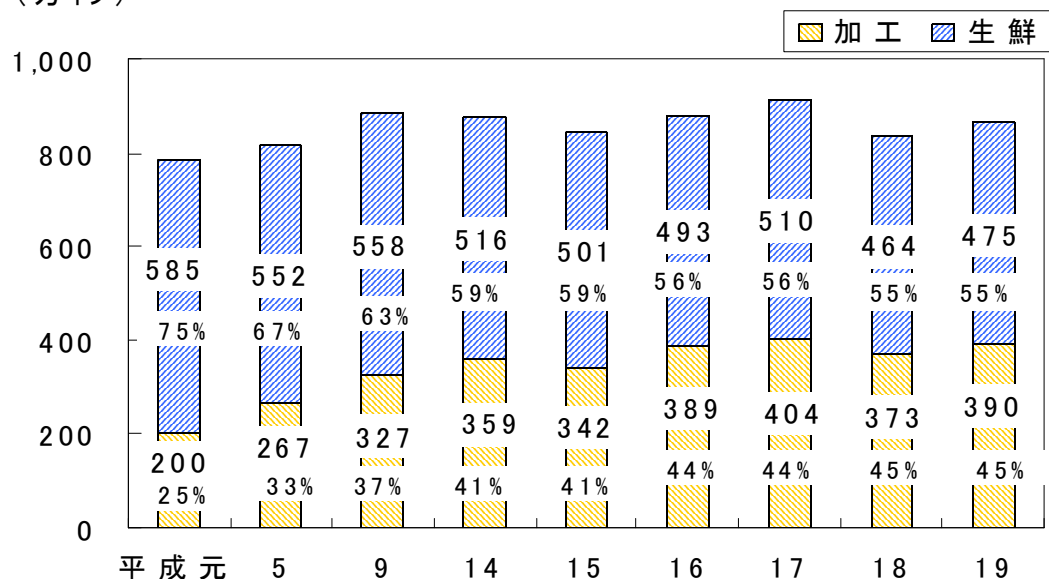
図2-1 果実の自給率の推移



資料：農林水産省「食料需給表」を基に推計

図2-2 果実の加工用の需要量の推移

(万トン)



資料：農林水産省「食料需給表」を基に推計

国産果実の利用拡大に向けた課題としては、加工用果実の内外価格差の大きさに加え、野菜と同様に以下のような加工・業務用向けの安定供給体制の整備に向けた取組が必要となっている。

- ① 原材料の安定供給に向けた産地と食品製造事業者等をつなぐ「中間事業者」の育成・確保
- ② 産地・生産者側の意識を改革した上での産地体制の整備
 - ・「加工用は、すそ物対策」という意識からの脱却
 - ・定時・定量・定品質・定価格のほか、多様なニーズへの対応
 - ・安全の確保への対応
 - ・一次加工の高度化、近代化の推進
 - ・生産・流通体制の高度化の推進
 - ・高付加価値化商品・商材の開発の推進

野菜と同様に、果実の生産・流通体制は、現在、委託販売による家計消費用への仕向けを中心としたものとなっているが、加工・業務用需要に対応するためには、中間事業者を核とした安定的な国産加工用果実の供給体制を構築することが急務と言える。

（２）今後の取組方向

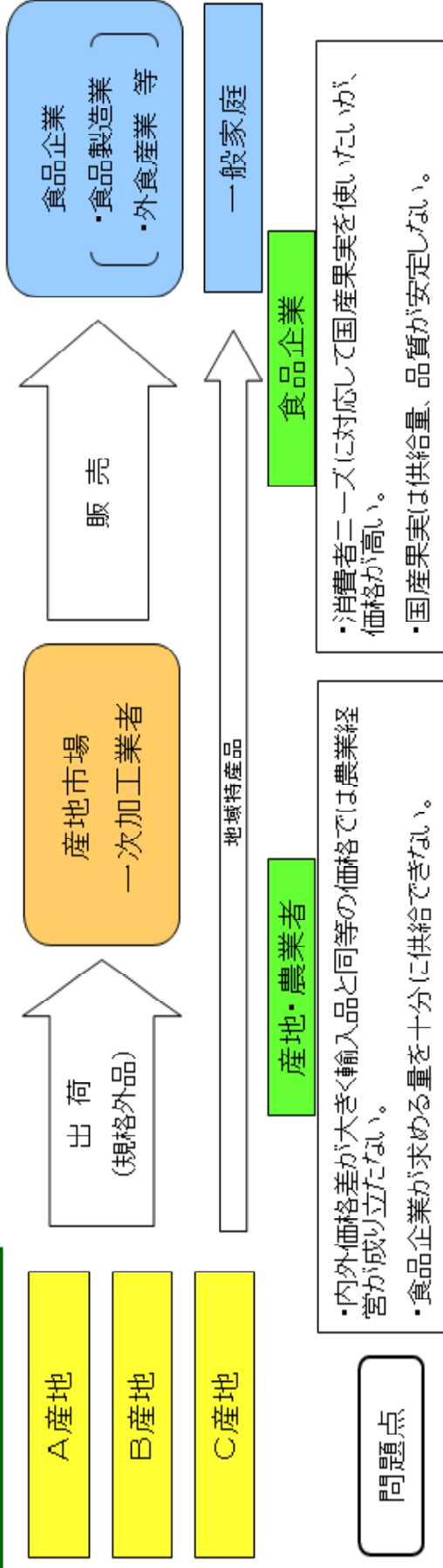
加工用の果実については、国産品と輸入品との間で供給量、価格の大きな差があるため、価格競争を行うよりも、高品質・産地・品種等の国産の利点を活かし、高価格帯での差別化された市場でのシェア獲得を目指すことが重要と考えられる。

具体的には、実需者ニーズに対応し、国産の利点を活かした果実を使った高付加価値の新品・新商材を開発することで新たな需要を創出し、この需要に対して国産原料を安定的に供給する体制を整備することが必要であり、特に期待される仕向け先としては、素材の価値が活かしやすいカットフルーツや菓子等が考えられる。

付加価値の高い商品開発が重要であることから、中間事業者によるマーケティング、情報収集と、それに基づいた、産地の生産意欲にかなう新品・新商材の企画・提案が進むことが重要である。

果 実

これまでの供給体制



新たな取組

付加価値の高い新商品・新素材の開発を推進し、国産原料果実の安定的な供給体制(サプライチェーン)を構築

新たな供給体制

